

第1章 序論

1. 本研究の背景

1930年代—日本における方言学の黎明期—以降、日本語のアクセント面での方言差は多くの研究者の注目を集め、数十年來の地道な調査の蓄積を通じて、日本全国の各地方におけるアクセントの分布・地域差についてはすでに詳細に明らかにされている。本書で取り上げる福井県・石川県方言のアクセントについても、その概略と大まかな分布・地域差は（他の地方と比べるとやや遅れながらも）1950年代には平山輝男の一連の研究（1951a, b, 1953, 1954a, b）によって初めて明らかにされている。しかしアクセント研究の黎明期・初期段階においては、まず大まかな地域差を把握することを目的として多数の地点で調査を行い1つの方言について深く追究はしないという研究が多く、全国を見渡しても、ほんの概略だけは知られるものの詳細については全く報告がないという地域の方が広い。また当然ながら全ての町村・全ての集落で調査が行われたわけではないので、どのようなアクセント体系が分布するのか全く不明な地域・集落も依然として残されていた。

1980年代に入ると北陸地方の中では金沢市方言（上野・新田1982, 1983）や白山市白峰方言（新田1985a）など一部の主要な方言についてはアクセント体系の詳細な記述・分析が進んだ。しかし福井県嶺北方言については1950年代以降、再度多地点調査を展開しアクセント分布の地域差を徹底的に明らかにしようとする研究も、1つのアクセント体系を詳細に記述しようとする研究も現れず、研究の進展があまりない状況が続いた。

2010年代になり、福井県方言のアクセント研究は大きな転機を迎える。平山（1953）以降本格的な調査がほとんどなく、アクセント分布の詳細が未詳のまま無型アクセントあるいは曖昧な二型アクセントの分布域と推測されてきた福井平野周辺地域に、「三型アクセント」に分類される新種のアクセント体系が相次いで発見されたのである（新田2012, 松倉2014など）。

本書は、長らくアクセント研究の空白地帯であったが最近急進展を見せている福井県方言のアクセント研究の、現時点での成果を取りまとめたものと位置

付けられる。本書では福井県の中でも特にアクセント多様性の著しい嶺北地方西部のアクセント体系を中心に取り上げる。4章では嶺北地方沿岸部に分布する三型アクセント、5章では嶺北地方北部（旧坂井郡域）に分布する二型アクセント、そして、6,7章ではこれらのN型アクセントを取り囲むように分布する石川県加賀市、福井市、今立郡池田町、南条郡南越前町の多型アクセントを取り上げる。4～7章でこれらの体系について体系別（地点別）に記述を行い、8章以降では各地の体系の系統関係と成立過程の再建・推定を試みる。本書の記述内容は、筆者が2013年3月に本格的に方言調査を始めて以降、折々北陸各地を訪ね歩いて生え抜きの方言話者の発音を聴き取ったものに基づく。

本書はこのように福井県の中でもさらに限られた地域の方言のみを記述対象とするもので、一見すると、ごく狭い範囲にしか分布しない珍しい方言の発音を蒐集したにすぎない、きわめて局所的な研究に思われるかもしれない（そういう一面も確かにある）。しかし、本書で提示する類型論的な多様性に富んだアクセント体系の分析・系統論的な考察は、福井県方言の研究にとどまらず日本語・琉球諸語のアクセント研究全体に対して示唆を与え得るものと考えている。例えば、4章で記述する「三型アクセント」と呼ばれるタイプのアクセント体系は、福井県の他には島根県隠岐方言（広戸・大原1953）と琉球諸語の一部方言に存在する体系であるが、その共時論的な性質や歴史的な由来について近年議論が活発化しており、そのような中で本研究は隠岐方言や琉球諸語のアクセント研究の進展にも寄与することが期待される。その他にも、「下降式音調」を有する体系（6章）、母音の広狭など分節音の構造がアクセントに影響を与える体系（6,7章）、フット（foot）という韻律単位がアクセントを担う単位になる体系（7章3節）など音韻論的・類型論的に見て興味深い特徴を有する方言が目白押しである。

本書は嶺北地方西部において分布面積でも話者人口でも最も高い割合を占める「無型アクセント」（あるいは「無アクセント」）と呼ばれるタイプのアクセントは取り上げない。世間一般に言われる「福井弁」のアクセントはこのタイプにあたる。本書で取り上げ（られ）ない理由は単純で、福井弁にはその名の通り「アクセントが無い」からである。ここで言うアクセントとは平たく言えば「1つ1つの単語ごとに決められた一定のピッチパターン（音の高低）」を指す。

例えば同じ福井県内にある大野市方言（大野弁）では「鼻」は $\overline{\text{ハナ}}$ と全体を平らに、「花」は $\overline{\text{ハナ}}$ とハを高く発音するといった区別がある。これは同音異義語のペアに限った現象ではなく、例えば「米」は $\overline{\text{コメ}}$ ではなく $\overline{\text{コメ}}$ 、「鳥」は下りではなく $\overline{\text{トリ}}$ 、のように全ての単語につきどういう高低を付けて発音すべきかが決められているものである。本書が研究対象とするのはこのような現象である。一方福井弁（福井平野上の方言）にはこうした区別・規則が存在しない。ここで言う「アクセント」がそもそも存在しない福井弁は必然的に本書の研究対象からは外れてしまうことをお断りしておく。ただし「（一般に福井弁の話される地域とされる）嶺北地方西部の全域が無アクセントなわけではない」というのが本書が示す重要な発見の一つで、福井・鯖江・武生等の平野部市街地からある程度距離のある海沿いや山間の地域には明瞭なアクセントの区別を有する方言が広く分布することが明らかになっている。

2. 記述対象地域の地理概説

本書では、福井県嶺北地方¹の西部とその周辺に位置する7市4町（石川県小松市、加賀市、福井県あわら市、坂井市、福井市、越前市、敦賀市、吉田郡永平寺町、丹生郡越前町、今立郡池田町、南条郡南越前町。図1中で下線あり）でアクセントの調査を行った結果を報告する。

嶺北地方周辺の地形の起伏（平野と山地の分布）は図2に示す。本地方の西部には、九頭竜川と日野川の流域に福井平野が広がる。福井市西部から南越前町にかけての沿岸部には標高500m程の山地（丹生山地）が続き、平野部と沿岸部が隔てられている。海岸線に山地が迫っているため、沿岸部には平地が少なく険しい海岸地形が続く。本地方の中央部、永平寺町から福井市東部、池田町にかけては標高500m～1400m程の山地（越美山地）が広がる、福井平野に注ぐ九頭竜川と足羽川の上中流域にあたる。本地方の南端、南越前町周辺には標高700m～1000m程の山地が広がり、福井県嶺北地方と嶺南地方の境界（南越前町と敦賀市の市町境）は標高628mの木ノ芽峠で隔てられている。この一帯は海岸地形も非常に険しく、新潟県の親不知と並ぶ北陸道随一の難所である。そのため、同じ県内にありながら両地方の方言上の相違は大きい。